

ブックレット 著者からのメッセージ

「里海を歩く－志津川湾を訪ねて－」

仲上 健一

(水資源・環境学会会長・立命館大学名誉教授)

「里海」という言葉は「里山」とともに、今では、すっかり定着してきました。里海の構成要素は「多様性」と「持続性」からなります。里海の保全と再生を支える「多様性」の要素として、「物質循環」、「生態系」及び「ふれ合い」、里海作りの実践を支える「持続性」の要素として、「活動の場」と「活動の主体」があり、これらの5つの構成要素が、それぞれ円滑に働くことによって「里海」は育てられます。

宮城県南三陸町にある志津川湾は、「きれいで・豊かで・賑わいのある」という3要素が揃った日本を代表する里海です。南三陸町は、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波の教訓を踏まえて、防災に強いまちづくりが町民一丸になって進められ、2006年12月には「南三陸町地域防災計画」が策定され、万全な防災計画と防災意識の高い南三陸町でしたが、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震により壊滅的な被害を受けました。

本書は、南三陸町および志津川湾が、東日本大震災から12年たった今日、どのようなプロセスで復興し、現在、何を目指しているかを紹介しています。

志津川湾では、東日本大震災を契機として、様々な新しい試みが行われました。その成果として、単に牡蠣養殖の生産だけに及ばず、環境に大きな負担をかけず、地域社会にも配慮した養殖業を認証する世界的団体である水産養殖管理協議会(ASC)に、2016年5月に志津川湾戸倉地区の牡蠣養殖が認証されました。2018年10月18日に南三陸町志津川湾がラムサール条約湿地に登録されています。東北地方では初の海域の条約湿地であり、海藻の森＝藻場の貴重さが認められての登録は国内で初めてです。

2017年3月3日には、「南三陸さんさん商店街」本設商店街がオープンし、全国からの多くの観光客で賑わっています。また2022年10月1日には、南三陸町の震災伝承館「南三陸311メモリアル」がオープンし、東日本大震災の教訓を学ぶことができます。

志津川湾の里海としての復活が、南三陸町そして東北地方の新しい希望の光になることを祈念して執筆しています。是非本書を携えて、志津川湾を訪れ、海と人に触れてほしいです。